『十帖源氏』巻２〈末摘花〉Ver2　　平成２５年３月版
担当者：小川千寿香

主な登場人物
〈光源氏〉…物語の主人公。
〈大輔の命婦〉…光源氏が身の回りの世話をさせている女性。
〈常陸の親王〉…末摘花の父。故人。
〈末摘花〉…常陸の親王の娘。
〈頭中将〉…光源氏の義兄。
〈侍従〉…末摘花の幼馴染で侍女。

〔５４・オ〕
【翻字本文】
　　末摘花　〔割・源十七才二月より次の年の春までの
　　事也。若紫よりさきの事也。夕顔の
　　巻の次と見るべし。以詞名也。〕
夕がほの上の事おぼしわすれず。たゆふの命婦といふは、
色このめるわかうどにて、めしつかひ〔傍・め＝源〕給ふ。故常陸の
みこの御むすめ、心ぼそくて残りゐ給へるを、物のつ
いでに源にかたり聞えければ、あはれと聞給て、この
命婦にあんないさせ、いさよひの月おかしき程にお
はしたり。命婦入て、「御ことのねいかに」とてめしよす
れば、姫君かきならし給ふ。「おなじくは〔傍・お＝源〕けぢかくてき
かせよ」との給へど、「心ぐるしげ〔傍・心＝命詞〕に物し給ふを、うしろめ
たきさまにや」と聞ゆ。源はすいがいのかくれのかたに

【現代語訳】
　　末摘花　〔〈光源氏〉が十七才の二月から翌年の春までの
　　ことです。〈若紫〉の巻より以前のことです。〈夕顔〉の
　　巻の次にあたる話と考えてください。物語の本文から巻の名前をつけました〕
〈光源氏〉は〈夕顔〉のことを忘れられません。〈大輔の命婦〉という女性は、
若く魅力的な侍女で、〈光源氏〉が身の回りの世話をさせています。亡き〈常陸の親王〉の
娘（末摘花）が心細く暮らしていると、あるとき〈大輔の命婦〉が
〈光源氏〉に話しました。話を聞いた〈光源氏〉は〈末摘花〉をかわいそうに思い、〈大輔の命婦〉に
案内をさせて、月の美しい十六夜に〈末摘花〉の屋敷に行きました。
〈大輔の命婦〉は（別の部屋に〈光源氏〉を通しておいて、自分は）〈末摘花〉の部屋に入り、〈末摘花〉
に「琴を弾いてみませんか」と琴を持ってこさせると、
〈末摘花〉は琴を弾きはじめます。〈光源氏〉は〈大輔の命婦〉に、「どうせなら、もっと〈末摘花〉の
近くで
聴かせてくださいよ」と言いましたが、〈命婦〉は「〈末摘花〉が憂欝そうだったので、
あなたと引き合わせるのをためらいまして」と言います。（帰るとき、〈末摘花〉を一目見たい）〈光源
氏〉が垣根の陰に

〔５４・ウ〕
【翻字本文】
たちより給ふに、もとよりたてるおとこあり。誰ならん
とおぼせば、頭中将、源の内より出て大殿にも二条院
にもおはせぬを、いづちならんと跡につきておは
したり。源のぬきあしにあゆみのき給ふに、ふと
よりて頭中将、

もろともに　大内山は　いでつれど
いるかた見せぬ　いさよひの月
〈源〉里わかぬ　かげをばみれど　ゆく月の
いるさの山を　たれかたづぬる
ひとつ車にのりて、大殿にかへり給ふ。八月廿日
あまりの月のおかしきに、命婦にかたらひあはせて

【現代語訳】
立ち寄ると、すでに一人の男性が立っていました。〈光源氏〉が、「誰だろう」
と思ったところ、その男性とは〈頭中将〉なのでした。〈光源氏〉が宮殿を出てから左大臣邸にも二条院にも
帰らないので、どこに行くのだろうと、後をつけてきたのでした。
〈光源氏〉が、気付かれないように立ち去ろうとすると、
静かに近付いてきた〈頭中将〉が、
もろともに　大内山は　いでつれど
いるかた見せぬ　いさよひの月
（と歌を詠んだので、〈光源氏〉も次のように詠みました）
里わかぬ　かげをばみれど　ゆく月の
いるさの山を　たれかたづぬる
〈光源氏〉と〈頭中将〉は、一つの車に一緒に乗って左大臣邸へ帰りました。さて、八月二十日頃の
月の美しい夜に、〈光源氏〉は〈大輔の命婦〉と示し合わせておいて、

〔５５・オ〕
【翻字本文】
おはす。姫君、命婦にすかされて、たいめんし給ふ。
〈源〉いくそたび　君がじゝまに　まけぬらん（原文通り）
ものないひそと　いはぬたのみに
姫君の御めのとご侍従とて、はやりなるわか人さしよりて、
かねつきて　とぢめん事は　さすがにて
こたへまうきぞ　かつはあやなき
〈源〉いはぬをも　いふにまさると　しりながら
をしこめたるは　くるしかりけり
姫君は、たゞ我にもあらずはづかしげなれば、いまは
かゝるぞ哀におぼしける。夜ぶかう二条院へ帰給ふ。
頭中将きて、「こよなき御あさいかな」といへば、おき

【現代語訳】
〈末摘花〉に会いに行きました。〈末摘花〉は〈大輔の命婦〉に言いくるめられて〈光源氏〉と会うことになったのです。（〈光源氏〉は〈末摘花〉に次の歌を詠みました）
いくそたび　君がじゝまに　まけぬらん（原文通り）
ものないひそと　いはぬたのみに
（〈末摘花〉がなかなか返事をしないので）〈末摘花〉の幼馴染で〈侍従〉という、せっかちな若い侍女が〈末摘花〉に近寄って、（次のように代わりの歌を詠みました）
かねつきて　とぢめん事は　さすがにて
こたへまうきぞ　かつはあやなき
（この歌に対する〈光源氏〉の歌は次の通りです）
いはぬをも　いふにまさると　しりながら
をしこめたるは　くるしかりけり
〈末摘花〉がとても恥ずかしそうな様子なので、〈光源氏〉は、〈末摘花〉のこのような
世間慣れしていない雰囲気が可愛らしいと思いました。〈光源氏〉は夜遅くに二条院へと帰りました。

（翌日の朝、）〈頭中将〉が訪ねてきて、「ずいぶんと朝寝坊ですね」とからかうので、

〔５５・ウ〕
【翻字本文】
あがり給ふ。朱雀院行幸、楽人、舞人、さだめらる
べきよしつたへ申さんとて、まかで侍とて、同じ車
にて内に参給ふ。夕つかた、ひたちのみこの姫君
に御文つかはし給ふ。
　　夕霧の　はるゝ気しきも　まだ見ぬに
　　いぶせさそふる　よひの雨かな
御返しえし給はねば、侍従ぞ例のをしへ聞ゆる
　　はれぬよの　月まつほどを　おもひやれ
　　おなじこゝろに　ながめせずとも
試楽のほど過てぞ時々おはしける。打とけたるよ
ゐの程入給て、かうしのはざまより見給へば、ごだち

【現代語訳】
〈光源氏〉は起き上がりました。〈頭中将〉は、朱雀院の行幸に同行する楽人や舞人を決め
なければならないことを伝えに来たのでした。〈光源氏〉と〈頭中将〉は、一緒の車で
宮殿へ出勤しました。夕方、〈光源氏〉は亡き〈常陸の親王〉の姫君（末摘花）に
恋文を送ります。（手紙には次の歌を書きました）
　　夕霧の　はるゝ気しきも　まだ見ぬに
　　いぶせさそふる　よひの雨かな
（手紙を受け取った〈末摘花〉が）やはり返事をできないでいるので、〈侍従〉が昨夜のように歌を代わりに読みました。
　　はれぬよの　月まつほどを　おもひやれ
　　おなじこゝろに　ながめせずとも
舞楽の予行が終わってからは、〈光源氏〉は時々、〈末摘花〉の屋敷へ通いました。（ある冬の日、〈光源氏〉は、〈末摘花〉に仕える）侍女達がくつろいでいる
宵の頃に屋敷を訪ね、格子窓の間から部屋の中をのぞいてみました。部屋では年配の侍女が

〔５６・オ〕
【翻字本文】
四五人、物くふもあり。みなさむげに、ふるきもの
きてふるふもあり。かたはらいたければ、立のきて、
たゞいまおはするやうにて打たゝき、入給ふ。雪か
きたれふり、風あれて火もきえにけり。からうじ
て火ともしつ。此姫君は、ゐだけのたかう、をぜな
がに、御はなは、ふげんぼさちののり物とおぼゆ。いろ、
雪はづかしくしろうて、ひたいつきはれたるに、猶
しもがちにて、はなのさき色づきたり。かみはうち
きのすそにたまりて、ひかれたる程一尺ばかり、
うつくしげにめでたし。ゆるし色の、うはじらみたる一
かさね、くろきうちき、うはぎにはふるきのかは

【現代語訳】
四、五人いて、何か食べている人もいました。侍女たちはみんな寒そうにしていて、古びた着物を着て震えている人もいます。〈光源氏〉は見ていられなくなって立ち去り、
たった今来たかのように格子を叩いて、中に入ります。雪がたくさん降り、
風も強かったので、灯火が消えてしまっています。やっとのことで火がともりました。

〈末摘花〉の姿は、座高が高く胴長で、
鼻は普賢菩薩が乗り物にしている象のようです。顔の色は、
雪が恥じ入るほどの白さで、額は広くはれぼったく、それでも
面長に見えます。そして、鼻の先が赤くなっていました。髪は
着物の裾のあたりに溜まるほど長く、床に引きずっている部分の長さは一尺くらいありそうで、
じつに美しく、すばらしい様子です。着ているものは、薄い赤紫色の色が抜けてしまったような着物
一揃いに、黒の上着、その上には黒貂の毛皮で、

〔５６・ウ〕
【翻字本文】
ぎぬ、いときよらにかうばしきをき給へり。いたう
はぢらひて、口おほひし、打ゑみ給ふ気しきは、は
したなうすゞろびたり。いかで打とけぬ御心ざまぞとて、
　　朝日さす　軒のたるひは　とけながら
　　などかつらゝの　むすぼゝるらん
との給へど、たゞ〈むゝ〉と打わらひて口をもげなるも
いとおし。かゝる人をわれならぬ人は見忍びてんや
と哀におぼさる。松の雪のみあたゝかげに降つめる。
山里めきて、橘の木のうづもれたる、御随身して
はらはせ給ふ。うらやみがほに松の木のをのれとお
きかへり、さとこぼるゝもおかしとおぼして出給ぬ。

【現代語訳】
とても良い香りのするものを着ています。〈末摘花〉が、とても
恥ずかしがって、口元を袖で隠し、微笑んでいる様子は、〈光源氏〉には、
よそよそしく感じられました。〈光源氏〉は、〈末摘花〉が心を開いてくれていないなと感じたので、
　　朝日さす　軒のたるひは　とけながら
　　などかつらゝの　むすぼゝるらん
という歌を詠んだのに、〈末摘花〉は「むむ」と微笑んで口ごもっている様子が
かわいそうです。（〈末摘花〉の部屋を出た〈光源氏〉は、）あのような姫（末摘花）を自分以外の男性
が我慢できるだろうかと思うと、
切なくなりました。《庭》の松の木に積もった雪が、ふんわりと綿のように温かそうに見えます。
雪深い山里のように、《橘の木》が雪に埋もれていたので、〈光源氏〉は《家来》に
《雪を払わせ》ました。すると、雪を払ってもらえなかった松が橘をうらやましがったように、ひとり
でに跳ね上がり、
さっと積もっていた雪がこぼれました。それを面白いと思いつつ、〈光源氏〉は外に出ました。

〔５７・オ〕
〈絵〉
末摘花の屋敷の庭で、光源氏が家来に、橘の木に積もった雪を払わせている場面。

〔５７・ウ〕
【翻字本文】
御車出べき門はあけざりければ、かぎのあづかり尋
出たれば、おきなのいみじきがむすめにや、さむしと
思へるけしきにて、あやしき物に火をほのかに入
て、袖ぐゝみにもたり。おきなが戸をえあけやら
ねば、よりてひきたすくる。源、
　　ふりにける　かしらの雪を　みる人も
　　をとらずぬらす　あさの袖かな

きぬ、あや、わたなど、おひ人共、彼おきなのためまで
おぼしやりて、奉り給ふ。年も暮ぬ。命婦参り
て、姫君の御文たてまつる。
　　からころも　君が心の　つらければ

【現代語訳】
車の通れる門が開いていないので、鍵を持っている人を探すと、
（お爺さんが）出てきて、そのとても年をとったお爺さんの娘らしい女性も、寒そうに
やってきました。娘は、粗末な器に小さな灯火をともし、
袖で風を避けながら持っています。お爺さんが一人では門を開けられないようなので、
娘も手伝います。〈光源氏〉は、（その光景を見て歌を詠みます）
　　ふりにける　かしらの雪を　みる人も
　　をとらずぬらす　あさの袖かな
〈光源氏〉は、絹、綾、綿などの着物を、（侍女たちだけでなく）年をとった者たち、あの門番の老人のことまで
思いやって、〈末摘花〉に贈りました。そうして年末になりました。〈大輔の命婦〉が尋ねてきて、
〈光源氏〉に〈末摘花〉からの手紙を届けました。（手紙には次の歌が書かれていました）
　　からころも　君が心の　つらければ

〔５８・オ〕
【翻字本文】
　　たもとはかくぞ　そぼちつゝのみ
あさましのくちつきやとおぼして、此文のはし
に、てならひに、源、
　　なつかしき　いろともなしに　なにゝこの
　　すゑつむ花を　袖にふれけん
〈命婦〉くれなゐの　ひとはなごろも　うすくとも
　　ひたすらくたす　なをしたてずは
又の日、源より、
　　あはぬ夜を　へだつる中の　ころもでに
　　かさねていとゞ　見もしみよとや
七日の節会はてゝ、末つむへおはしたる。れいの

【現代語訳】
　　たもとはかくぞ　そぼちつゝのみ
下手な歌だなと思った〈光源氏〉は、この手紙の余白に、
（次の歌を）走り書きします。
　　なつかしき　いろともなしに　なにゝこの
　　すゑつむ花を　袖にふれけん
（この〈光源氏〉の歌を見た〈大輔の命婦〉の歌です）
　　くれなゐの　ひとはなごろも　うすくとも
　　ひたすらくたす　なをしたてずは
後日、〈光源氏〉は〈末摘花〉に返事の手紙を書きました。（その手紙には次の歌を書きました）
　　あはぬ夜を　へだつる中の　ころもでに
　　かさねていとゞ　見もしみよとや
（年が明けて）正月七日の行事も終わった頃、〈光源氏〉は〈末摘花〉の屋敷に行きます。屋敷は以前の

〔５８・ウ〕
【翻字本文】

さまより、けはひよづき給へり。むらさきの〔む＝合点〕上の
かたへおはして、ひいなあそび、ゑなどかきて
いろどり、かみのながき女をかきて、はなにべに
をつけて見給ふ。姫君もわらひ給へり。
くれなゐの　花ぞあやなく　うとまるゝ
梅のたちえは　なつかしけれど

【現代語訳】
（寂れた）様子と比べれば、ずいぶんと活気づいて見えました。（〈光源氏〉が二条院の）〈紫の上〉の部屋へ行って、〈紫の上〉と一緒にお人形遊びをしたり、絵を描いて
色を塗ったりしていたときのことです。〈光源氏〉が髪の長い女の絵を描き、鼻を赤く
塗って見てみました。それを見た〈紫の上〉も笑っています。
（ある日、庭の紅梅の蕾を見た〈光源氏〉が詠んだ歌です）
　　くれなゐの　花ぞあやなく　うとまるゝ
　　梅のたちえは　なつかしけれど